

国道駐在所 ● 島田一男



島田一男  
国道駐在所

青樹社刊

国道駐在所

● 定価 350 円

昭和45年1月5日発行

著 者 島 田 一 男

発行人 土 井 勇

東京都千代田区三崎町2—6—7 青 樹 社

電話(261)9766番・(263)7267番 振替東京47648番  
落丁・乱丁本はお取り替え致します

国道駐在所

## 目次

国道駐在所 五

拳銃往来 四

百十一万分の一 一〇

通り魔 一六

梅雨夫人 一四

夢の中の血痕

二五

渋柿事件

二六

闇を縫う影

二七

暗闇の指令

二八

装幀

前川

直



## 国道駐在所

### 1

海岸から国道までの急な坂を、一ッ気にあがると、のどがからからになった。

それから小半丁、国道添いに歩くと、赤い屋根の洒落たドライブ・インがある。

「——駐在さん……、お茶呑んで行かない……」

若い女が、ドライブ・インの入口から声をかけてくれた。——二カ月ほど前から、崖下の北川温泉<sup>ほつかわ</sup>に稼ぎに来ているマッサージの女の子である。

「——うん……今日は、ちょっと急ぐのですね……」

私は、女の子に笑いかけながら、ドライブ・インの前を急ぎ足で通り過ぎた。

——いや……私は、いつものように明るく笑いかけた積りだが、或いは、案外、ベソをかいたような顔になっていたかもしれない……。

駐在所へ帰り着くまでに、伊東方面から来た自動車と四度すれ違った。その度に、私はハンカチで口と鼻を押さえ車を除けた。

——舞い上る土ぼこりを避けるため……、と見せかけて、実は顔を隠し、車の中の人物を眺めたのである。だが、その四台の車には津田善七は乗っていなかった。

「三都子は何？」

駐在所へ入るなり、奥の多根子に訊ねた。

「——学校ですよ。今日は、お帰りが早いじゃありませんか。どうかしたんですか？」

「いや……」

「今夜は、シケるかもしれませんよ。前線が通過するって放送してましたわ」

私は、入口近くに椅子を持ち出して、腰を降した——ここなら自動車を見張ることが出来る。まさか津田が、バスで来るようなことはあるまい。いまや彼は、北海道石油の社長なのだから……。

「——変ね、今日に限って、三都子のことを気にしたりして……」

多根子が、不自由な左脚をひきずるようにして、お茶をいれて来た。

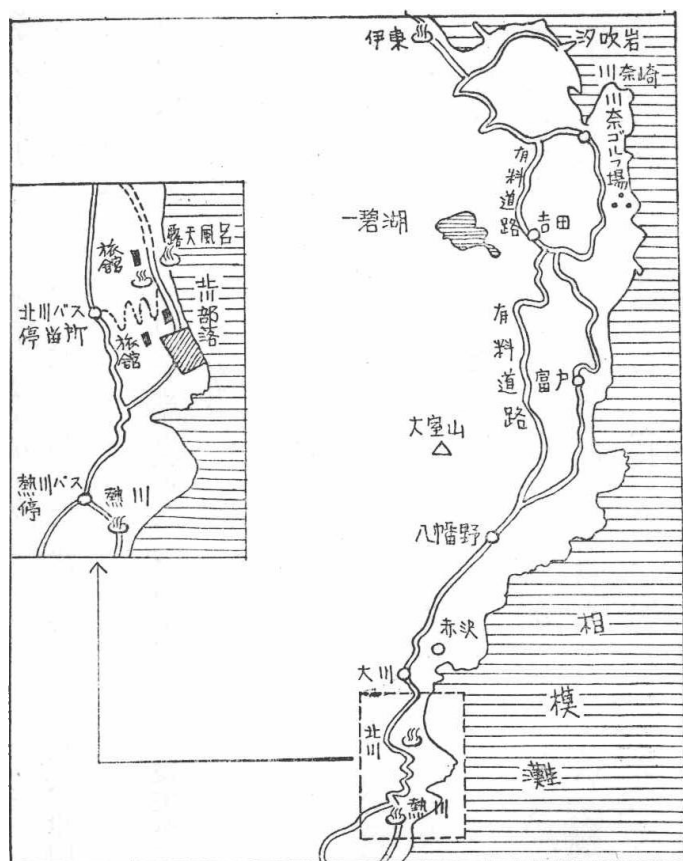
「いいんだ。別に理由はないよ」

「中学も三年になると、受験準備やなんかで、帰りが遅くなるんですよ」

「うん……、わかってるよ」

——三都子も、中学三年か……。

私は、熱い番茶をすすりながら、ソッと、多根子の横顔を見た。



——多根子と三都子がハルピ

ンで、夫であり、父である津田善七から置きざりにされたのは十五年前……、終戦の直後であった。

その頃、私達は、ハルピンの総領事館で働いていたのである。私は領事館警察のヒラ巡查、津田は、特高係の刑事として、大した羽振りであった。

彼のやり口が、陰険で残酷なものであったことは、私もよく知っている。

——ふん……、これでも、憲

兵なんかには比べれば、お手やわらかな方さ……。

そううそぶく津田を、一般在留邦人は、津田善七と言わず、津田悪七と呼んだほどである。かくて、敗戦……。

津田は、生れたばかりの三都子を抱え、その上、産後の養生が悪く、左足が不自由になった多根子を捨てて、姿を消したのである。

——憲兵や特高は銃殺される……。

そんな噂が乱れ飛んでいる時であった。

——殺されてたまるものか！ 俺は脱出してみせる。お前、命が惜しかったら、満人の女房になれよ。幸い子供は女だ。高く売れる。それで当分食いつなぐんだなア……。

これが、多根子に残した津田の言葉だった。

私は、捨てられた母と子を、自分の妻と娘と言うことにして、終戦三年目に日本の土を踏んだ。

——日本へ帰るまでの、表面だけの夫婦親子……、そういう約束だったが、長崎県はしのさきの南風崎に上陸したときには、体より先きに、気持の方が、離れられなくなっていた。

「——僕達の力で、三都子を、幸せではち切れそうな花嫁さんにしてやろうよ……」

寒々とした引揚寮の片隅でささやくと、多根子は私の胸にすがりついて泣いた。

早いものだ……。あれから、十五年たってしまった……。

「——やっぱり変ね……」

多根子が、心配そうに、私の顔をのぞきこんだ。

「いつものあなたと違うわ」

「気のせいだろう」

「でも……いつものように、巡廻なすったの？」

「いや……、港には行かなかった」

「あなた今日、漁師の専造さんとこへ行く筈だったんでしょ？」

「あ……、忘れていた」

熱海へ働きに行っていた専造の娘が、妊娠して戻って来た。専造は、相手の男を訴えると言っている。そのことについて、相談に行く約束だったのである。

——午前中は山よりの村を廻り、午後からは、海岸通りの温泉場から北川漁港を巡廻する……。これが、二年間、私がまもり続けて来た日課だった。

それを、今日はじめて破った。

「専造さん、待ってるでしように……」

「あとで、行ってみるよ」

「ね……。どうしてなの？」

「あとだって、いいじゃないか」

「いいえ、なぜ港へ行かなかったの？」

——その理由を言えと言うのかい？

言えない……。下のかめや旅館の玄関脇には、宿泊予約客の名前が書き出してある。そこで、津田善七の名前を見て、素ッ飛んで戻って来たなんて、とても言えない……。

「可哀そうに……」

「え!？」

「専造さんの娘……。あの子、高校を出てるのよ。だから、港の事務所なんかで働くのいやだと言つて熱海のホテルへ住み込みで行ったんだけど……」

「相手は、年中熱海へやってくる化粧品セールス・マンらしいよ」

「憎いわ……」

私は、わざと無関心をよそおい。多根子の顔を見なかった。——男に捨てられた女の話は、私達には禁物なのである。

それに、私は国道から眼を離すことが出来なかった。——駐在所へ帰ってから、バスが二台、タクシーが二台、自家用の素晴らしい外車が一台、南へ向って行った。が……、津田の顔は見当らなかった。

川奈から八幡野<sup>やわたの</sup>近くまでの有料道路では、八〇キロから九〇キロもぶっ飛ばす車も、この辺りの石ころ道では、せいぜい四〇キロくらいのスピードである。車の中の顔を見るのは、それほど難かしくはなかった。

「——三都子は、大丈夫かしら？」

「なんのことだい？」

「高校なんか、無理して行かなくてもいいんじゃないかしら……」

「取り越し苦労だよ。あの子は……」

私は、思わず立ち上った。——空色のシボレーが、駐在所の前を走り抜けて行った。

「——あの子は、高校どころか、大学へも行くんだ。俺の娘だよ……。誰がなんと言ったって、三都子は、俺の娘なんだッ」

空色のシボレーには、津田善七が乗っていた。——他に中年の男がひとりと、女が二人……。そして、偶然にも、運転手を除く四人の男女は、駐在所の方へ、顔を向けていた。

## 2

夕方から、風が出て来た。

天城風の湿気を含んだ西風が、国道を越え、下の温泉場へ、漁港へ吹きおろして行く。風速は十メ

ートル前後であろう。この辺りで、これだけ吹けば、下田から石廊崎へかけては、十五メートル以上かもしれない。

「——困っちゃったなア……。降るかしら？」

食事をしながら、三都子が風の音を気にした。

「あたし、今夜、ドライブ・インの勝子さんと、いっしょに勉強する約束したのよ」

「今夜は出ない方がいい。かなり吹いている」

「風くらい平ッちゃら……。だけど降ると困るの。レインシューズ、修理に出しちゃったんだもの」  
すると、出し抜けに、多根子がきびしい声で言った。

「およしなさいッ。——出ない方がいい……。ッて、お父さんが仰有ったでしょッ」

私と三都子は、思わず多根子を見た。——多根子は顔をそむけるようにして、三人の湯呑みにお茶を注いでいた。

「——変なお母さん……」

「親がいけないって言うことは、よしたらいいでしょ？」

「だって、その積りだから、参考書をドライブ・インへ置いて来ちゃったのよ……。なにも、今夜に限って、おこらなくてもいいじゃないの」

確かに、今夜の多根子は、いつもと違っていた。——夕飯の仕度をするにも浮かぬ顔をしていた

し、食事中も、忘れ物をしたような態度だった。三都子に、こんな荒々しい言葉を叩きつけたことも、かつて無いことである。

——見たのかな!? 車中の津田に、気が付いたのかな……。

「——ちょっと、専造さんのそこへ行ってくる……」

茶袱台の前を離れながらそう言うのと、多根子が、ギョッと、私を見上げた。

「いまから!」

「まだ七時だよ」

「でも……明日になすったら?」

「——専造さんが、待ってるでしょうに……と、言ったのはお母さんだぜ」

私は、表の事務室へ出て、拳銃を吊り、警棒を腰に下げた。

「——あなた……」

いつの間にか、多根子がうしろに立っていた。

「拳銃、持っていらっしゃるの?」

「お巡りさんだぜ、俺は……」

「でも、私用のようなものじゃありませんか。それに、風も吹いてるし、雨も降るかもしれませんわ」

「それが、拳銃を置いて行く理由なのかい？」

「理由にはならないかもしれないけど、あたしは心配なの……。ね、拳銃を置いていってくださらない」

三都子が、ニヤニヤ笑いながら出て来た。

「お母さん、ノイローゼじゃない？ 一度、伊東の国立病院へでも行った方がいいわ」

「あんたは、黙っていらっしゃいッ」

私は、拳銃をとり出して、机のひきだしへ入れると、外套を着た。

「——三都子……。ドライブ・インへ行くなら、俺のゴム長をはいて行けよ。みつともないなんて、気にするなよ。夜だし、誰も見やアしない。無理して、カゼでもひいちゃつまらんから……」

私は、国道を通らず、蜜柑畑の間を縫って坂を降り、かめや旅館の裏へ出た。

かめや旅館は、断崖をすぐうしろに背おい、三階建の本館と、二階建の離れ三棟が、ひとかたまりになって、樹齢百余年の老松に囲まれていた。

玄関前の狭い道路には、波除けの腰壁が、五百メートルほど続いている。波除けの下には、巨大な丸石が重なり合い、打ち寄せる太平洋の波が、白い潮の花を咲かせているのである。

この辺りは遠浅ではない。巨石の続く海底は急に深くなり、海岸線から五十メートルも離れると、既に大謀網の漁場である。